〈論　文〉

文体における起源と拡散

—明治普通文から「である」体への移行に関する一考察—

小峰 克之

Abstract

現在学術文書の文体としては「である」体が一般的であるが、それ以前は明治普通文が標準文体であった。「である」体が一般社会に広まっていくのは明治 30 年代だが、小説における「である」体成立の研究が手厚いのに比して、明治普通文から「である」体への移行に関しては未だ不明な点が多い。小論では「である」体が拡散する過程で英語教育が一定の役割を担ったと考え調査してみた。その結果、明治前期の翻訳では「である」体による直訳が標準化していることが分かった。これは日々の授業で学生が「である」体による訳文を作成していたことを意味するが、教育の規模を考えればそのことは個人的修練に止まらず、社会における「である」体拡散の一段階として機能していたことを意味する。

キーワード：「である」体　明治普通文　拡散　英語教育　直訳

1. はじめに

大学の初年次教育は現在殆どの大学で実施されており、特に文章表現の指導は実施率が 90%を超えている[1]。筆者も現在担当しているのだが、最初の授業では文体について説明することにしている。文体は大別すると「です・ます」を用いた敬体と敬意を伴わない「だ・である」を用いた常体に分けられるが、レポートや論文では常体の中の「である」体で書くのが一般的である。例えば平尾昌宏（2016）では論文の書き方指南書 30 冊を調べた結果、敬体を認めるは 1 冊だけであったと報告されている[2]。

この「である」体は学術文章だけでなく、評論など意見を主張する場合に広く使われている。その特質については「中性的な表現」「ニュートラル」「普遍的性格」など様々に指摘されるが[3]、簡単に言えば客観性を有した表現ということである。

論文などの論理的な文章では、内容の客観性を損なわないように文体にもそれが求められる。その点で「です・ます」は日常的に使われるうえに受け手への敬意が露出しているため「誰かが話している」という感じが拭えない。つまり「です・ます」体では本文の語りが実体としてイメージされやすく、客観性が薄れてしまうのである。一方「である」体では客観性がある程度保たれる。それは「である」は敬意を表出しない表現であり、また「である」で言い切る形は日常会話で殆ど使われないため、本文の語りが実体化されにくいからである。同じ常体でも「だ」体ではこうはいかない。「だ」は親しい間柄で日常的に用いられるため俗なイメージが強く、客観性を必要とする文章には合わないのである。

このように「である」体は本文の語りが実体化しにくい文体であるのだが、その点で思い起こされるのが明治普通文である。明治普通文は明治期に広く用いられた文体で「文明論とは人の精神発達の議論なり」[4]のような漢文訓読を基盤とした文体である。この明治普通文で多用される文末の「なり」は口頭では用いられないため語りが実体としてイメージされに

くく、客観性が保たれる。ただ、この口頭表現との乖離から言文一致運動が起きるのだが、問題はそれに代わる新たな文体である。「です・ます」体などの敬体では語りが実体化しやすく抵抗がある。その点「である」体は口語に近いうえに語りが実体化しにくく、客観性も担保される。明治普通文の後継として「である」体が収まったのはこのようなことからであり、また、語り手の透明化が必要とされる近代小説において「である」体が多用されるのも当然の結果と言える。

さてその「である」体であるが、起源については翻訳語に由来することが既に明らかにされ定説化している。ただ、それがどのような経緯で拡散され明治普通文に取って代わったのかについては未だ曖昧な点が多い。そこで今回その点について考えてみたい。つまり、小論の主題は「である」体が拡散していく過程の一端を見出すことである。

2. 「である」体研究史とその問題

2.1 主要先行研究

ここでは「である」体に関する主な先行研究を確認する。まず注目すべきは山本正秀の一連の論考で、1944年の「デアルの沿革」以降様々な形で言及している。それに対して特に60年代に補足や疑義などが集中的に提出されて議論が活性化し、その成果が定説として現在の研究に引き継がれている。今ここで主要な先行研究を並べてみる。

山本正秀　（1944）「デアルの沿革」
杉本つとむ（1962）「近代語の標章：デアル体の発生と展開」
中村通夫　（1963）「「である」小考」
中村通夫　（1967）「である再考」
古田東朔　（1967）「幕末・明治初期の翻訳文等における「X＋アル」」
山本正秀　（1968）「「デゴザル」体から「である」体へ」
杉本つとむ（1998）「近代語の標章」『杉本つとむ著作選集2』

これらのうち山本正秀（1968）の中に「である」体成立に関する先行研究の成果をまとめた箇所があるので、その大略を以下に記す。

・鎌倉室町期に「にてあり」が「である」に変化。
・中世末に「ぢゃ」や「だ」が多用され、終止形の「である」は一旦見られなくなる。
・近世で一部の漢学者などの講義口調として使われる。
・近世後期に蘭学の翻訳語として使用され、その後英学に引き継がれる。
・特殊な口語として明治10年代に演説にも使われる。
・清水卯三郎（明治7）や物集高見（明治19）が試験的に文章で使用。
・小説ではまず嵯峨の屋おむろが使用（明治21）。
・その後に尾崎紅葉が『二人女房』（明治24～25）等で使用し、広まっていく。
・明治30年すぎには言文一致体小説の多くが「である」体となる。
・評論でも明治30年代中頃までに「である」体が広まる。

上記をまとめると、中世に成立した「である」は一度使われなくなるが、近世後期から翻訳語として使用された。それが演説に使われ、次いで小説に、そして評論にも使われるようになったということになる。

今参照した山本正秀（1968）では様々な文体に触れながら「である」体へと話が進んでいる。明治期の文章革新は各種口語体が相互に作用しながら進んでいくのでこれは当然のことなのだが、先に挙げた先行研究の他のものはみな「である」体への論究に特化しており、他の文体への言及が殆どない。それは「である」体の由来が口語ではなく翻訳語であるという、その特殊性による。つまり「である」は翻訳語として人工的に蘇生させられたのであり、一般的には話されることのない表現だったのである。

その由来について中村通夫は疑問を呈しているが、小論の目的は起源の追究ではなく拡散過程の検証なので、ここでは異説があることを紹介するにとどめる[5]。

序ながらもう一つ補足すると、文末を終止形「である」ではなく「であらう」「であつた」などで結ぶ形は中世以降かなり見られる。このことは「である」で文を結ぶ形の創出を後押ししたと考えられる。

以上、先行研究の成果を概観したが、これに関して次節で私見を述べてみたい。

2.2 「起源」収集の陥穽と「拡散」

「である」体に関する先行研究については気掛かりな点がある。次の二点である。

1 起源の追究が中心であること。
2 明治20年代については調査や論究の中心が小説であること。

一点目から。従来の研究は新たな試みや展開を拾い上げたものであり、その意味で各局面における起源の収集である。勿論それは重要なことではあるが、それに終始すると各局面での事の始まりは分かっても、その後の広がりや影響に関しては明らかにならない。

次に二点目。明治20年代については小説に対する調査や論究が中心であり、そのため明治30年代の論説などにおける「である」体の広がりも、小説の影響によるものというような印象を受ける。例えば先の山本正秀（1968）では小説に関する詳細な説明の後で、論説について次のように書かれている。

> 一方論説の文章も、明治三〇年代の中頃までに・山田美妙・幸徳秋水・島村抱月・夏目漱石・中井錦城・内村鑑三・岡倉由三郎・藤岡勝二・新村出・保科孝一・正岡子規・高浜虚子・堺枯川らが、しだいに「である」体を採用し、さらに明治四〇年代の自然主義文学運動を迎えて、小説・論文ともにますます「である」体が進出し、ついに近代の口語文体の文末辞法は、「である」体に定着を見たのであります。

今引用した部分では論説への「である」体拡散について「明治三〇年代の中頃までに」と幅を持たせた表現になっているが、例えば幸徳秋水は明治30年に、また島村抱月、夏目漱石、中井錦城も明治32年にそれぞれ新聞や雑誌に「である」体の文章を発表しており、その始まりは明治 30 年代初頭と考えてよい[6]。さて、今引用したこの評論についての説明だ

が、小説に比して余りに簡潔で、最後に結論として「である」体が定着したと言われてもその過程は見えてこない。このような先行研究の状況について野村剛史（2019）では「「まあそうなるであろう」程度で済ませてきたような気がする」と述べられており、明治普通文から近代口語文への移行という視点が欠如していると指摘されている[7]。

確かに明治 20 年代には小説の文体に大きな動きが見られ、それを説き明かすことは重要である。だが、小説と言う一つのジャンルでの動きがそのまま他ジャンルでも踏襲されるとは限らない。しかも、当時評論の分野で用いられていた明治普通文は、行政文書から新聞雑誌まで様々な分野で使用されていた当時の標準文体なのである。従って、その数年前に小説という特定のジャンルで「である」体が広まったからといって、その動きがそのまま社会全体の標準文体にまで波及したとするのはいささか早計であろう。

明治 30 年代初頭から始まる明治普通文から「である」体への移行について、小論では、小説の影響以外にも何らかの力が各方面から働き、それらが拡散の準備あるいはステップとなったと考える。当面の課題は「である」体拡散を促したその力、場合によっては複合的なものであろうが、それを見出すことである。

その候補として国定教科書における言文一致体の採用や、それを推進した言文一致会等の諸団体の活動が考えられる。これらの動きが「である」体の拡散を加速させたのは確かであるが、国定教科書での採用は明治 37 年から、また諸団体の結成も全て明治 33 年以降であることから、明治 30 年代初頭から始まる動きの要因としては時期的にやや遅い。

他に時期的に可能性があるものとして演説の影響が挙げられる。この演説と「である」体との関係は先行研究でも言及されてはいる。しかし、語法や使用条件などに立ち入った検証はこれまで見られない。それは、そもそも音声メディアのない時代の特殊な場での口頭表現がどの程度書き言葉に影響を与えるのか判断が難しいからであり、また、谷崎潤一郎のように逆に演説口調を嫌うといった場合もあり、やはり単純にはいかない[8]。それでも演説と「である」体との関係は検討すべき問題であり、今後の課題と言える。

それでは「である」体の拡散に関連する研究がこれまで他になかったのかというと勿論そうではない。北澤尚、許哲（2005）では『読売新聞』の文末表現を明治8年から明治17年まで調査した結果、「である」で文を閉じる形は1例のみ、ただし伝聞の「であるといふ」の形が目立っていると報告されている[9]。また、田中章夫（2001）では明治20年代に「である」体の評論がいくつかあることが紹介されている[10]。小論でもこれらの研究のように明治30年以前に「である」体の拡散を促したと思われる事象を見出したいのである。

この点について杉本つとむ（1998）に示唆的な部分がある。杉本はその中で尾崎紅葉の「である」体について「紅葉らが大学予備門で学習したリーダーや翻訳書にも、デアル体が用いられていたはずである」と述べた後、「英文と訳文とを一つのものにして学習したであろうから、デアル体も英語学習族の間には、急速な勢いで普及していったことは、想像するのに難くない」としている[11]。引用文中の「リーダー」とは読解力養成のためのテキストのことであるが、この英語教育の影響というのは確かに考え得ることである。だが、これまで検証されたことがなく、実際のところはよく分からない。そこで小論では次章より英語教育における「である」体の使用実態を調査し、その影響について考えてみることとする。

3. 明治前期の英語教育における「である」体 の使用状況

3.1. 明治前期の教育状況

この章では明治前期の英語教育における「である」体の使用状況を調査するが、その前に当時の教育制度を確認しておく。なお小論では明治前期を明治元年から 20 年までとする。

明治 5 年の学制で中学校の科目に外国語が設けられた[12]。ただ、実際には外国語を教授しない中学校や「変則」という名で英語中心の課程を設ける中学校などがあり、現場の対応は様々であった[13]。また中学校とは別の官立外国語学校が創設され、さらに私立学校も乱立するなど教育制度は体系性を欠いていた。

そこで政府は明治 14 年に「中学校教則大綱」で中学校を初等科と高等科に分け、英語の週時間数をそれぞれ 6 時間と 7 時間にした。また官立外国語学校は改組などで縮小し、最終的には廃止した。さらに明治 19 年（1886）の中学校令で中学校を 5 年制とし、第一外国語の週時間数を 1 年から順に 6、6、7、5、5 と規定した。

この明治 19 年の改革によって教育制度が整うわけだが、それまでは英語教育も様々であった。例えば夏目漱石の場合、明治 12 年（1879）に府立一中に入学するもそこでは英語を学ばず 14 年に退学、二松学舎で漢文を学んだ後、明治 16 年に成立学舎に入学、そこで英語を学び翌年に東大予備門に入学している[14]。また、尾崎紅葉は明治 14 年に府立二中（同年一中に併合）に入学するも 16 年に退学、三田英学校を経て東大予備門に入学している。

なお明治前期では海外で編纂された英語の教科書をそのまま用いるのが一般的であり、そのため参考用に多くの翻訳書が出版された。特に中学校令などの各学校令が出された明治 19 年の前後 4 年間、明治 18 年から 21 年までは出版ラッシュとなっている。

3.2. 明治前期の直訳の方法

ここから具体的に翻訳書を見ていくが、まずは蘭学から受け継いだ「である」体の形を確認しておく。文法書である文典とリーダーからそれぞれ 1 例掲げる。

A　明治 4 年　クワッケンボス著、戸田忠厚訳『英文典独学　初号』3 丁表
B　明治 19 年　島田奚疑訳『正則ニユーナシヨナル第一リードル独案内』p.7

A	The	word	ice	is	a	sign	that
		言ハ②	アイスト云フ①	アル④⑪		徴デ③⑩	夫レハ⑤所ノ⑨
	stands	for	frozen	water.			
	代ル	⑧	凍リタル⑥	水ト云フ言ニ⑦			

B	This	is	a	boy	and	his	dog.
	此レハ	有ル	一ノ	童子	及ビ	彼ノ	犬デ
	(1)	(7)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)

クワッケンボスの文典とナショナルのリーダーはどちらも当時の代表的なテキストである。A の語順を表す数字は実際のテキストでは漢数字を〇で囲んだ形で、「徴」には「シルシ」とルビがある。また、A では英語の発音がカタカナで記されているがここでは割愛した。

どちらのテキストでも英単語に数字と日本語訳を振っていて、その数字の順に日本語を

繋げていくと直訳ができるようになっている。つまり、返り点を使った漢文訓読のような方法で逐語的に訳していくのである。例えば A を数字の順に読むと「アイスト云フ言ハ徴デアル夫レハ凍リタル水ト云フ言ニ代ル所ノ徴デアル」、B では「此レハ一ノ童子及ビ彼ノ犬デ有ル」となり、どちらも「である」体であることがわかる。この「である」体は能動態の be 動詞に日本語の「ある」を固定したことにより生じるのだが、この形は直訳では標準的な形で、例えば他の構文では以下のように訳される[15]。

形容詞　‘Her fur is white as snow.’　→　「彼女ノ毛皮ハ雪ノ如ク白クアル」
進行形　‘the man is coming here.’　→　「人ガ此処ニ来リツヽアル」
過去形　‘This cat was in a nest.’　→　「此猫ハ巣ノ内ニ有リシ」

当時の直訳はこのように機械的に訳したものであるから日本語としては不自然であるが、とりあえず訳すことはできる。ちなみに「であろう」の場合は will に「あろう」を固定し、‘We will jump rope.’ならば「我々ガ綱ヲ跳ブデアラフ」と訳す。

この訓読式の直訳は蘭学から引き継いだもので、例えば大庭雪斎の『訳和蘭文語』(1857) では以下のようになっている[16]。

健康ハ	アル		大ナル	宝デ	ヨリ	富	
gezondheid	is	de	grooter	schat	dan	rijkdom,	［健康ハ富ヨリ大ナル宝デアル］

さて、この直訳による「である」体は、実際どの程度使われていたのだろうか。次節ではその調査結果を掲げる。

3.3. 文典の翻訳書における「である」体の使用状況

ここでは翻訳書における「である」体の使用実態を確認する。翻訳書のリスト自体は既に森岡健二（1999）や馬本勉（2014）にあるのだが[17]、それらではどの程度「である」体が使われているのか実際のところは分からない。そこで小論では「である」体が用いられているか否かという視点から調査する。

その「である」体の認定であるが、小論では文末を「である」で結ぶ形を「である」体とする。従って、たとえ文末が「であろう」「であった」等であっても、「である」で結んでいなければ「である」体とは認定しない。また文末が「なり」の場合は文語体とする。

今回の調査では国立国会図書館デジタルコレクションを利用する。同コレクションでは翻訳書を多数公開しており、全体の傾向を掴むのに十分であると考える。またインターネット上で常時確認できる利点もある。調査対象は明治前期（元年～20 年）に出版された文典とリーダーの翻訳書とする。これは明治 20 年代の小説界の変革以前のものに限定するためである。出版年及び訳者名は基本的に国会図書館の書誌情報に拠るが、原著者名及び書名は表紙や奥付等に拠ってその一部を適宜改めた。また分冊のものは「上・下」のように一冊として扱い、出版年不明のものや実質的な再版は除外した[18]。なお初版が確認できなかったものについては再版以降で確認できた最も早いものを採り、出版年もそれに従った。

それでは文典の翻訳書に関する調査結果から掲げる。文典の訳文については三つのタイ

プに分類できることが分かった。「である」体、文語体、「である」体の直訳に文語体の訳文を併記したもの、この三つである。まずは訳文が「である」体のものから掲げる。

表 1　訳文が「である」体の文典翻訳書

明治 3 年	クワッケンボス著、大学南校助教訳『英文典直訳　上・下』
明治 4 年	クワッケンボス著、戸田忠厚訳『英文典独学　初号・二号』
明治 5 年	ピネヲ著『通俗英文典 上・中・下』
	ピネヲ著、榧木寛則訳『挿訳英文典 初編』
明治 16 年	コックス著、都筑直吉訳『克屈文典直訳』
明治 17 年	スウヰントン著、斎藤秀三郎訳『英語学新式直訳』
	ブラウン著、中西範訳『英文典直訳』
明治 18 年	クワツケンボス著、高宮直太訳『英文典独案内』
明治 19 年	クワッケンボス著、栗野忠雄訳『英文典直訳』
	ピネヲ著、玉井靖三郎訳『英文典独学』
	ピネヲ著、萩原孫三郎訳『英文典独案内』
	ピネヲ著、生駒蕃訳『英文典独案内 ： 文法詳解』
明治 20 年	クワッケンボス著、斎藤八郎訳『英文典直訳』
	クワッケンボス著、水沢郁訳『英文典直訳』
	クワッケンボス著、山本栄治郎訳『英文典直訳』
	スウヰントン著、蘆田束雄訳『英文典直訳』
	スウヰントン著、栗野忠雄訳『英文典直訳』
	スウヰントン著、斎藤八郎訳『英文典直訳』
	スヰントン著、大島国千代訳『小文典直訳』
	ディクソン著、佐野友三郎訳『英文典直訳』
	ピネヲ氏　栗野忠雄訳『英文典直訳』
	ピネヲ著、斎藤八郎訳『英文典直訳』
	ブラウン著、戸代光大訳『容易独習英文典直訳』

表 1 では英文全文掲載、英文の一部を掲載、日本語訳のみ、この 3 種類が混在しているが、いずれも日本語訳は「である」体で計 23 冊が確認できた。このうち水沢郁訳や山本栄治郎訳など文末で「である」ではなく「なり」が多少見られるものもあるが、いずれの書でもその数は稀であり基本的に「である」体で書かれているとして差し支えない。

表 1 で注目すべきは大学南校のものであろう。大学南校は東京大学の前身であり[19]、最高学府が「である」体で訳出しているのだからその影響力は想像に難くない。

次に訳文が文語体のもの、及び「である」体と文語体による併記のものをまとめて掲げる。

表 2　訳文が文語体、及び「である」体と文語体による併記の文典翻訳書

○文語体	
明治 19 年	ブラウン著、沢田重遠訳『英文典釈義 ： 文法詳解』
	ブラウン著、源綱紀訳『英文典直訳』
	ブロウン著、長野一枝訳『英吉利文典講義 ： 一名英吉利文典独修 前・後』（但し、後編は明治 20 年出版）
○併記	
明治 17 年	クワケンボス著、垣上緑訳『英国文典独案内』
明治 20 年	ピネヲ著、佐藤雄治訳『英文典独案内 ： 正則挿註　1・2』

文語体の 3 冊は稀に「である」が見られるものの、全体としては「なり」を用いた文語体

で書かれている。また「である」体に文語体の訳文を併記したものは 2 冊であった。

以上が現段階で確認できたものである。その結果は「である」体 23、文語 3、併記 2 で、文典の翻訳書では「である」体が完全に定着していることが分かった。

3.4. リーダーの翻訳書の特徴

次にリーダーの翻訳書についてであるが、調査結果を掲げる前に文典との相違について触れておく。リーダーの教科書では初級用の第一から第二、第三と学習が進むにつれて文章が複雑かつ長文になる。そのため翻訳書もかなりの分量となり、原文の英文を掲載せず訳文のみのものが多数見られる。また、文章の特徴としては、題材の中心が物語であるため場面の状況や人物の行動を描写した部分が多くを占め、その結果「である」で物事を断定する部分は少なくなっている。以下に C としてその翻訳例を示す。

C 英文　明治 18 年、木村多喜訳『サンダー氏ユニヲン第三リードル独案内』pp.269-270
　訳文　明治 18 年、井上蘇吉、三上精一訳『サンダー氏ユニオン読本直訳　第 1—第 3』より「サンダーユニオン第三読本直訳次編」三十二章「老キ槲樹」p.27

Did you ever see a large oak tree standing all alone in a field? It is a grand sight. Mr. Barlow had just such a tree on his farm. Its Large roots spread out far and wide, and some ran very deep into the ground.

汝ガ嘗テ野ニ於テ総テ独立スル所ノ大ナル槲樹ヲ見ナセシカ」夫ガ広大ナル景デアル」ミストルバルローガ丁度彼ノ田地ノ上ニ斯様ナル樹ヲ持チシ」夫ノ大ナル根ガ遥カニ而シテ広ク拡カリシ而シテ或物ガ地ニ迄甚ダ深ク入込ミシ

翻訳文では英文の“had”や“ran”を「持チシ」や「入込ミシ」と訳しているように、動詞の過去形には過去の助動詞「き」の連体形「し」を終止形の代わりに使っており、そのことからこの文章を文語のように感じるかもしれない。だが、この「し」で閉じる形は通常の文語ではないだけでなく当時の文法書では誤りとされている。例えば大槻文彦は『言海』でこの形を誤りとし、さらに『広日本文典』で「此ノ誤、直訳ノ翻訳書ニハ、常ナリ」と書いている[20]。つまり、このような文章こそが口語ではないが通常の文語でもない、正に直訳の文章なのであり、その中で事物の描写に混じって断定表現の「である」が使われるのである。

3.5. リーダーの翻訳書における「である」体の使用状況

ここからリーダーの調査結果について述べる。調査方針は文典と同じであるが、明治 20 年の出版数が突出しているため、まずは明治元年から 19 年までの調査結果を掲げる。明治前期では National、Longmans、Swinton、Union、Willson が 5 大リーダーとされるが[21]、翻訳書の場合はタイトルでその区別がつくため、今回は出版年と訳者名の順で並べる。なお原文の英文が掲載されているか否かの区別はしない。

さて、翻訳書の訳文についてであるが、リーダーの場合、訳文が「である」体のもの、文語体のもの、「である」体と文語体の混交、「である」体による訳文に別の文体の訳文が併記

されているもの、この四つのタイプに分かれる。まずは表 3 として文語体、混交、併記の三つのタイプをまとめて掲げる。

表 3　訳文が文語体、混交、及び併記されているリーダーの翻訳書

○文語体	
明治 6 年	松山棟庵訳『サルゼント氏第三リイドル　上・下』
明治 19 年	青木輔清訳『ウヰルソン氏第一リードル読法改良挿訳』
	青木輔清訳『ウヰルソン氏第一リードル読法改良直訳』
○混交	
明治 18 年	佐藤重道訳『サンダース氏ユニヲン第三読本意訳　上』
明治 19 年	河瀬清太郎訳『ニユーナシヨナル第三読本直訳』
	河瀬清太郎訳『ニユーナシヨナル第四読本直訳』
○併記	
明治 18 年	榊原英吉訳『ウイルソン氏第二リードル実用独学：新方傍訓』
明治 19 年	江馬主一郎訳『ローヤル第一読本独案内』
	鈴鹿保家訳『正則ニユーナシヨナル第一リーダー独案内』
	鈴鹿保家訳『正則ニユーナシヨナル第二リーダー独案内』
	滝川新訳『第二ナシヨナルリーダー解訳明弁』

文語体の 3 冊から概要を述べる。松山訳は全体に渡って和文調の文語による意訳。青木訳の二冊は、原文に数字と訳語を振った訓読式にするか原文の後に訳をまとめて載せるかの違いであるが、ともに能動態の be 動詞に「なり」を当て、例えば“The lark is a bird.”を「雲雀ハ鳥ナリ」のように訳している[22]。

次に混交の 3 冊。佐藤訳では、各物語の会話部分は人物に合わせて「です・ます」体や「である」体で記し、語り手の叙述は文語体で書かれている。要するに文体の使い分けによる混交である。それに対して河瀬訳の 2 冊では、「なり」と「である」が混ざりあいながらどちらも同程度に使用されている。以下に D としてその河瀬訳の例を示す。

D　河瀬清太郎訳『ニユーナシヨナル第四読本直訳』第七十四課「阿非利加ノ蟻」 p .385

D　一ノ長キ規則立ツタル線ニ於テ森ヲ通ホシテ進ムベク其レカ彼等ノ癖テアル殆ント二寸ノ広サ及ヒ屡々長サニ於テ屡々数里ナル一ノ線ナリ。此ノ線ニ沿フテ総テカ尚大ナル蟻デアル

このように河瀬訳では、極端な場合「なり」と「である」が交互に用いられている。

続いて「である」体に別の文体が併記されているものについて。この 5 冊ではその全てで英文と数字で語順を示した直訳の「である」体がまず示される。この直訳とは別に上記 5 冊では別の文体による訳が示されている。その文体は様々で、中心となる文体を述べると、江馬主一郎訳、鈴鹿保家訳の第一リーダーでは「です・ます」体、鈴鹿保家訳の第二リーダーは「です・ます」体と「でござります」体の混交、榊原英吉訳と滝川新訳は稀に「である」が見られるもののほぼ文語である。この 5 冊の中から具体例を一つ E として掲げる。

E　鈴鹿保家訳『正則ニユーナシヨナル第一リーダー独案内』pp.13-14

E　This　is　my　little　kitty.
一 是ハ　五 有ル　ニ 私ノ　三 小サキ　四 小猫デ　　是ハ私ノ小猫デス

直訳の「である」体に別の文体の訳文を併記する試みは、直訳の不自然な日本語に対する意訳の試みと見ることができる。文語への回帰も同様であろうが、意訳が目立ってくるのは出版ラッシュ終了後の明治22年からであり、明治前期ではまだ数が少ない。

次に表4として訳文が「である」体であるリーダーの翻訳書を並べる。

表4　訳文が「である」体のリーダーの翻訳書

明治5年	浦谷義春訳『英学捷解：一名・リードル独学』
明治13年	多治見十郎訳『第一リードル直訳』
	村井元道訳『維孫第一読本直訳』
明治15年	岡田篤治訳『ウヰルソン第一リードル』
	村井元道訳『ウイルソン氏第二リイドル直訳』
明治16年	大場景明訳 『ウヰルソン氏第二リードル独学』
	栗野忠雄訳『ウヰルソン氏第一リードル直訳』
	錦織精之進訳『ウヰルソン氏第二読本直訳　上』
	西山義行訳『ウヰルソン氏第二リードル独案内』
	真野秀雄訳『ウヰルソン氏第一リードル独稽古』
明治17年	一川真輔訳『ウヰルソン氏第二リードル独案内』
	井上蘇吉訳『サンダー氏ユニヲン第一リードル独案内』
	栗野忠雄訳『ウヰルソン氏第三リードル直訳』
	関根定吉訳『ウヰルソン氏プライマル英学独稽古』
	矢野安三郎訳『サンダアー氏第四読本直訳並解釈』
明治18年	生駒蕃訳『ウヰルソン氏第一リードル独案内』
	生駒蕃訳『ウヰルソン氏第二リードル独案内』
	生駒蕃訳『サンダース氏第一リードル独案内』
	井上蘇吉、三上精一訳『サンダー氏ユニオン読本直訳　第1－第3』
	岩崎徳馬訳『ウヰルソン氏第三リードル独案内』
	岡本信訳『ウヰルソン氏正則変則第一リードル独学』
	岡本信訳『ウヰルソン氏正則変則第二リードル独学』
	岡本信訳『ウヰルソン氏プライマー独稽古』
	木村多喜訳『サンダー氏ユニヲン第三リードル独案内』
	佐藤政太郎訳『ユニヲン第一リードル直訳』
	高宮直太訳『バアーネス氏ニユーナシヨナル第一リードル独案内』
	田中利堅訳『ウイルソン氏第一リードル独案内』
	高柳政籌訳『ウヰルソン氏第一リードル独案内』
	外村譲訳『ウヰルソン氏プライマー独案内』
	中村愿訳『ユニヲン第一リードル独案内』
	中村愿訳『第二リードル独案内　従五課至大尾』
	西山義行訳『ウヰルソン氏第一リードル独案内　2版』
	塙房次郎訳『ニユー、ナシヨナールリードル独学自在　第一』
	塙房次郎訳『ニユー、ナシヨナールリードル独学自在　第二』
	馬場栄久、細井僖吉訳『ウヰルソン氏第一リードル独案内　2版』
	馬場栄久、細井僖吉訳『ウヰルソン氏第二リードル独案内』
	早見純一訳『サンダーユニヲン第一リードル独稽古』
	平山清春訳『ニユーナシヨナル第二読本直訳』
	伏原有文訳『ウヰルソン氏第一読本直訳』
	前田元敏訳『ウヰルソン氏プライマー独案内』

	増田隼多訳『ウヰルソン氏第一リードル独稽古』
	真野秀雄訳『ウヰルソン氏第二リードル独稽古』
	三上精一訳『ニユーナシヨナル第一リードル独稽古』
	三上精一訳『ニユーナシヨナル第二リードル独学』
	吉田守善訳『ウヰルソン氏第一リードル独案内』
	渡辺重綱訳『サンダーユニヲン第二リードル独稽古』
明治 19 年	遠藤栄三郎訳『正則サンダースユニヲン第一リーダー独案内』
	大塚祐英訳『プリマア独習 ： 一名教師いらず』
	小野田金弥訳『正則ニユーナシヨナル独案内 ： 第二リードル』
	小西直治郎訳『サンダール氏ユニオン第一リードル独案内』
	島田奚疑訳『正則ニユーナシヨナル第一リードル独案内』
	島田奚疑訳『正則ニユーナシヨナル第三読本直訳』
	関桂太郎訳『正則第一リードル独学』
	高宮直太訳『ニユーナシヨナル第二リードル独案内』
	田代仙次郎訳『ニユーナシヨナール第一リードル実用独学』
	外川秀次郎訳『サンダユニヲン第一リードル独案内』
	永井岩太訳『正則ニユーナシヨナル第二リードル独案内』
	中村愿訳『ユニヲン第二リードル独案内　前編』
	塙房次郎訳『ニユー、ナショナルリードル独学自在　第三』
	林十次郎訳『ユニヲン第一リードル独案内』
	林十次郎訳『ローヤル第三リードル直訳』
	広原光太郎訳『サーゼント氏第一リーダー独案内』
	元木貞雄訳『ニユーナシヨナル第二リートル独案内』
	森修一訳『正則ニユーナショナル第二リードル独案内』
	和田松造訳『ニユーナシヨナル第三リードル直訳』

表 4 の中には「なり」が散見されるものがあるが、その頻度からみて「である」体として問題ないと判断した。また、森修一訳には話の内容をまとめた「意解」が挿し挟まれているが、訳ではないのでこちらに加えた。

さて調査の結果であるが「である」体による直訳が圧倒しており、翻訳の際の標準となっていることが分かる。全体の傾向を見るためならここまでで十分であると考えるが、一応明治 20 年の調査結果を見てみる。ただし明治 20 年は出版数が多いので書名一覧は付表として拙論の末尾に回し、ここでは数字だけを述べる。明治 20 年の調査では「である」体が 58 冊、訳文が併記されているものが 10 冊確認できた。ここで全ての調査結果をまとめる。

表 5　文典およびリーダーの翻訳書における調査結果

分類	出版年	「である」体	文語体	混交文体	併記
文典	明治元～20 年	23	3	0	2
リーダー	明治元～19 年	65	3	3	5
	明治 20 年	58	0	0	10
計		146	6	3	17

ご覧の通り「である」体の数が飛び抜けていることが分かる。なお、この傾向は出版ラッシュ最終年の明治 21 年まで続く。

以上、この章では文典及びリーダーの翻訳書を調査し、「である」体の採用状況を確認し

た。その結論として、明治前期の英語教育では日本語訳として「である」体が標準的であったことが分かった。それでは、このことが持つ意味は何であろうか。次にその点について考えてみたい。

4. 教育における「である」体使用の意味

4.1. 実際の授業の状況

前章では明治前期において文典及びリーダーの翻訳書で「である」体が標準化していることを確認した。この章ではその意味を考えたいのだが、その前に確認しておきたいことがある。それは、実際の授業で本当に「である」体が使われていたのか、という点である。

松村幹男の『明治期英語教育研究』は様々な史料を駆使して明治期の英語教育の実像に迫ったものであるが、その中で明治前期の英語教育に関する証言を蒐集した箇所がある[23]。今その中から訳に関するものを三つ抜き出す。一つ目は村井知至による明治 7 年頃の松山中学校での様子、二つ目は南日恒太郎による明治 17 年頃の富山中学校での様子、最後は沢柳政太郎が講演のために作成した文章で、明治前期の英語教育について語っている箇所である[24]。

> （前略）私共の昔しやつた英文の訳し方は一字一句悉くそれに訳を附しさうしてそれを繋ぎ合はせて何とかかんとか訳にして見る。即ち直訳なので全然日本語にはなつてゐないのであるが、精密に英文を研究して、その意味を捕へんと努めた所は確かに此の変則英語の特長であつたと思ふ。　（村井知至「英語研究苦心談」）

> 当時の教授は矢張り旧式で、so…that を「事程左様に」と訳し、一文章を教へるにも只それを直訳して聞かせる丈で、日本の文章に直せば如何なるかと云ふ様なことは全然無頓着であつた、　（南日恒太郎「英語研究談」）

> 而して其の文章につきて意義を尋ねるや、恰も日本人が従来読み慣れたる漢文を理解すると全く同一筆法を用ひ、一字一語につきて訳述し、茲に現今に至るまで英語教授法の障疑を為せる所謂直訳法なるものを生じた。　（沢柳政太郎『我国の教育』）

村井知至（1861—1944）は英語学者で東京外国語学校教授、南日恒太郎（1871—1928）は学習院大学教授で同じく英語学者、沢柳政太郎（1865—1927）は東北帝国大学や京都帝国大学の総長を務めた教育者で、府立一中では尾崎紅葉や幸田露伴と同級である。これらの証言に共通する直訳とは訓読式の逐語訳であることは文意からも明らかであり、当然そこには当時の翻訳における標準文体であった「である」体も含まれることになる。やはり「である」体による授業は日常的に行われていたのである。そして、それを別の形で証明する史料が残されている。『明治時代の中学生英語学習帳』がそれである。

『明治時代の中学生英語学習帳』は明治 28 年に広島の日彰館中学校で行われた英語の授業記録で、筆記者は当時同校の学生であった市川亀四郎（1880－1945）、その内容は教師によるナショナルのリーダー第 2 巻の訳を口述筆記したものである。筆で書かれたそのノートはかなり字が乱れており、教師の口述に遅れまいと懸命に筆記した様が想像されるのだ

が、その訳が「である」体なのである。例えば原文15課の“Yes, John. The moose is a kind of deer. His horns are not like those of a deer, but his eyes and hoofs are.”の訳は「然リゼヨンヨ大鹿ハ鹿ノ種類デアル、彼ノ角ハ鹿夫等ノ如クアラヌ。然シ乍ラ彼ノ眼ト而シテ蹄（フース）ハ有ル」と書かれている[25]。この他にも屢々「である」で文が閉じられており、文体としては間違いなく「である」体である。この学習帳は明治前期のものではないのだが、逆に言えば、明治20年代の後半になっても「である」体による直訳が続けられていた証左と言える。

文典やリーダーの翻訳書の状況、著名な教育者たちの証言、実際の学生のノート、これらを総合すれば、結論は明らかであろう。やはり「である」体による訳文は学生たちによって実際に書かれていたのである。

4.2. 「である」体による疑似的な文章作成の修練

この節では明治前期の英語教育における「である」体標準化の意味を考える。結論を先に言えば、それは学生たちに「である」体による疑似的な文章作成の機会を与えたことである。

個人が文体を獲得するには主体的な文章作成の修練が必要である。「である」体の獲得についてもそれは同じで、「である」体の小説を読みさえすれば体得できるというものではない。そして、その修練を英語教育における直訳が疑似的に担っているのである。

ここで疑似的とするのは、翻訳は純粋に主体的な創作行為とは言い難いからである。それともう一つ。直訳の日本語は全体として不自然であり、その点で割り引いて考える必要があるからである。だが、そのような不自然な表現であっても英語の直訳として標準化されれば、学生はそれに従って日々「である」体を書いていくこととなる。つまり、明治前期の英語教育における直訳は、純粋な主体的行為とは言えないものの、結果的に「である」体獲得の修練となっているのである。

さらに言えば、そのような訳出作業が中等以上の教育で20年以上も行われていたのであるから、その規模を考えれば、この直訳における「である」体の標準化は、それが社会に拡散していく一つのステップとして機能していたと言っていい。「である」体は明治普通文と大きく異なるうえにそれまで一般的には書かれたことのない文体であり、そもそも「である」そのものが日常的にほぼ耳にすることがない表現である。それが何の準備もなく明治30年代初頭から突如社会の標準文体を切り崩していったとはやはり考えにくい。小説の影響はあるにせよ、それ以前に「である」体は英語の訳文として教場で日々書かれていたのである。

以上、明治前期の英語教育に於ける「である」体の標準化は、結果的に学生に「である」体の修練を強いた訳であるが、話はここで終わらない。なぜなら、明治前期は日本語による教科書が不足しており、様々な科目で英書による授業が行われていたからである。

4.3. 各教科における英書の多用

明治16年の小田勝太郎編『東京諸学校学則一覧』には東京の主な学校約50校の学則が掲載されているが、その中で部分的にでも使用教科書を載せている学校が28校ある。その一つである東京大学予備門の一年の教科書から英書だけを抜き出してみる。

読法『サンダル氏第四読本』
英語解釈『サンダル氏第四読本』『チヤンブル氏第五読本』
英作文及文法、書取『クエツケンボス氏作文階梯書』『コツクス氏第一文法書』
数学『トヽハンタル氏小代数書』『ライト氏平面幾何書』
生物学『ハツクスレー氏ユーマン氏合撰生理書健全書』
史学『スウイントン氏万国史』

他の学校でも同様に様々な科目で英書を使用しているのだが、その場合、各授業で日本語訳が施されていたことになる。たとえば以下のように。

（前略）横田純信先生は、パーレーの万国史を一時間に八ページ余り読んで訳して進まれた。先生が何処を読んで居られるか、何を訳されたかわからぬこともあったが、放課後に五六人頭を鳩めて彼処は先生が何と読まれた、此処はかく訳されたと語り合ひ、（後略）　（『松江北高等学校百年史』）

これは島根県松江中学校の明治 12 年頃の話である[26]。引用文中の万国史は今で言う世界史であるが英語のリーダーの役割を兼ねている場合もあり、『東京諸学校学則一覧』によれば慶應義塾など 18 校が英書で万国史を教授している。

この英語以外の科目での英書による授業は明治 20 年代に日本語の教材が開発されるに従って減っていったと沢柳政太郎は述べているが[27]、それまでは中等及び高等教育の現場ではよく見られるものであった。地理、歴史、数学など様々な科目を英書で学ぶのだから、それだけ直訳の「である」体を使用する機会も多かったことになる。明治前期の学生たちはこのような学習環境の下で日々英語と格闘し、それを日本語に訳出していったのである。

5. 結語

小論では「である」体の拡散に関して英語教育における「である」体の使用が関わっているのではないかと考え、当時の英語教育の状況を調査しその意味を論じてきた。その「である」体の使用であるが、明治前期には既に英語教育以外の分野にも広がっていた。『万国史』の翻訳書や清水卯三郎による化学の翻訳書『ものわりのはしご』は先行研究でもよく言及されるが、他にも中村順一郎訳『挿訳理学初歩』や久保田窮達訳『窮理書直訳』（ともに明治 5 年）など、かなり早い時期に物理学の分野でも「である」体の翻訳書が出されている。

上記のような書物として纏まったものならば目につきやすく、その位置づけも比較的容易である。判断に迷うのは、そうでないものの場合である。文章の一部など断片的なものは偶発的発生ということもあり、扱いが難しい。また、そもそも気付きにくい。だが、新たな表現が広がっていく時には、それが断片的な形で不意に現れることがある。

1　第一太陽名題「凡テノ日本人ハ愛国者デアル」ニ於テハ其主辞ナル「凡テノ日本人」ハ一国民ヲ包括シテ遺サヽルニ因リ之ヲ称シテ充実ヲ成スト云フ
2　海軍ハ日本ノ如キ島国ニ於テハ陸軍ヨリ大ニ緊要デアル

この 2 例はともに明治 16 年のもので、1 は千頭清臣「名題上名辞ノ充実」に見られる例[28]。論理学について論じたこの文章の中に命題の例文として上記のような例文が 10 例以上ある。2 は海軍主計学舎の入試問題で、和文英訳の和文である[29]。これらの例は断片的であるため、その背後に通底するものを想定しにくい。そして、それが想定されない場合、結局これらは孤立した断片として扱われる。だが、もしそれらに通底する淵源のようなものを見出すことができれば、それらは単なる断片ではなく、その淵源に起因する一連の動きの一つとして捉えることが可能となる。小論ではその淵源たりうるものとして、英語教育における「である」体の使用に注目した、ということなのである。ただし、そのためには「である」体が実際に使われていたという確証が必要となる。小論はそれを確定させる作業であったと言える。そして、調査の結果、明治前期の文典及びリーダーの翻訳書では「である」体が標準化していること、さらに回想録や学生が残したノートなどから実際に授業で「である」体が使われていたことが明らかとなった。また、これらのことから日々の授業は学生による「である」体獲得の疑似的な修練となっており、それは規模の点から見ても一般社会における「である」体拡散のステップとして機能していたと結論付けた。この結論の妥当性は、今後の検証次第といったところであろう。そして、やや先走って言えば、その検証作業の中で直訳による「である」体の限界もまた明らかとなり、そこから「である」体の汎用化という次の段階に入っていくのだが、もはや紙数も尽きたのでこれらについては稿を改めることとする。

付表

表 6　明治 20 年に出版されたリーダーの翻訳書の調査結果

○「である」体
浅沼錠太郎訳『スキントン氏第一リードル独案内』
蘆田束雄訳『スウキントンプライマー及第一リーダー正則独案内　2 版』
青山為造、有本貞義訳『ニユーナシヨナル第三リーダ独案内』
阿部欽次郎訳『スキントン氏第二読本直訳』
雨宮金護訳『正則発音ニユーナシヨナル第二リートル独案内』
飯塚栄太郎訳『正則実用ニユーナシヨナル第一リードル独案内』
飯塚栄太郎訳『ニユーナシヨナル第三リードル独案内』
飯塚栄太郎訳『ローヤルリーダ第三独案内』
石田隈次郎訳『正則実用ニユーナシヨナル第二リードル独案内』
石田隈次郎訳『ニユーナシヨナル正則実用第一読本独案内』
伊藤良蔵訳『正則ロングマンスニユーリーダー第二独案内』
植田栄訳『スウキントン氏第二リードル独案内』
上野己熊、片貝正晋訳『ロングマンス第三リードル独案内』
小笠原長次郎訳『ニユーナシヨナル第四リーダー直訳』
尾形弘訳『ニユーナシヨナル第二読本独案内』
奥村安次郎訳『ロングマンス第二リーダー独案内』
亀井晴吉訳『正則ニユーナシヨナル第三読本直訳』
木村滝訳『ロングマンス第一リードル独案内』
栗河鉱喜智、森岡貞義訳『正則ニユーナシヨナル第一リーダー独案内』
栗野忠雄訳『スウキントン氏第三読本直訳』
栗野忠雄訳『正則ニユーナシヨナル第一リードル独案内』
桑田熊三訳『ニユーナシヨナル第四読本直訳　上・下』

佐藤雄治訳『ウイルソン氏第一リードル独案内』
島田奚疑訳『ニユーナシヨナル第四読本直訳 ： 正則註解』
島田豊訳『正則ロングマン第一リードル独案内』
春藤作太郎、片貝正晋訳『ロングマンス第一リードル独案内』
春藤作太郎、片貝正晋訳『ロングマンスインファントリードル独案内』
杣田彌三郎訳『ローヤル第一リーダ独学自在　2 版』
杣田彌三郎訳『ローヤル第二リーダ独学自在』
嵩村道高訳『正則ニユーナシヨナルリーダー第三独修便法』
富塚玖馬訳『新撰ニユーナシヨナル第一リードル独り学ひ』
長野一枝訳『ウイルソン氏第一リードル講義 2 版』
中沢柄一訳『ニユーナシヨナル第三読本直訳』
西山義行訳『ロングマンス第三読本直訳』
野口繁次訳『スキントン氏第二リードル独案内』
馬場栄久訳『正則ニユーナシヨナル第二リードル独案内　2 版』
林十次郎、中村英吉訳『ローヤル第四リードル直訳　上・下』
林十次郎訳『ローヤル第二リードル独案内』
林十次郎訳『ロングマンスニユーリーダー第一独案内』
林十次郎訳『バルンス、ニユーナシヨナル第三リーダー独案内』
平山清春訳『スウキントン氏第二読本直訳』
前田定之助訳『ロングマン第一リーダー独案内』
増田隼多訳『正則英学独稽古 ： 一名通弁自在』
元木貞雄訳『ニユーナシヨナル第一リードル独案内』
元木貞雄訳『ニユーナシヨナル第三リードル独案内　3 版』
元木貞雄訳『意解挿入ニユーナシヨナル第三読本直訳』
森修一訳『正則ニユーナショナル第一リードル独案内　訂 2 版』
森修一訳『正則ロングマンインファント独案内』
矢島路久訳『ニユーナシヨナル第一ゥリーダ独案内 ： 両仮名附』
山田甚吉訳『ニユーナシヨナル第一読本独案内』
山本研治訳『ウ〒ルソン氏プライマー独修便法』
山本半司訳『ロングマンス氏リーダー独案内　第一』
山本秀雄訳『ニユーナシヨナル第二リードル独案内』
山本秀雄訳『ニユーナシヨナル第三リードル独案内』
横山包吉訳『サンダースユニオン第一リーダ正則独学』
若林謙吉訳『ロングマンス、ニユー第一リードル独案内』
若林謙吉訳『ロングマン氏ニユー第二リードル独案内』
渡辺政吉訳『ロングマンスインフアントリードル独案内』

○併記
小笠原長次郎訳『正則ニユーナシヨナル第一リーダァー独案内』
鈴鹿保家訳『正則ニユーナシヨナル第三リーダー独案内』
嵩村道高訳『正則ニユーナシヨナルリーダー第一独修便法　2 版』
嵩村道高訳『正則ニユーナシヨナルリーダー第二独修便法』
辻本貞造訳『正則ニユーナシヨナル第一リーダー独案内』
辻本貞造訳『正則ニユーナシヨナル第二リーダー独案内』
橋詰隆治訳『正則ニユーナシヨナル第一リーダー独案内』
林十次郎、堀口保治郎訳『ロングマン第一リーダ独案内』
森修一訳『ニユーナショナル第三リードル独案内　一・二』
横山文園訳『ニユーナシヨナル第四読本直訳講義　上』

注・分冊でその一部が明治 21 年以降にまたがるものは、その部分を除外し明治 20 年に出版された部分のみを掲げ、それを一冊として数えた。

文献

馬本勉（2014）「独習書データベース」『独習書の分析を通じた英語学習法の変遷に関する研究』科研費〈https://www.pu-hiroshima.ac.jp/p/umamoto/stb〉（2022.12.8 確認）
小篠敏明、江利川春雄（2004）『英語教科書の歴史的研究』辞游社
小田勝太郎編（1883）『東京諸学校学則一覧』英蘭堂
北澤尚、許哲（2005）「明治前期読売新聞の文体の推移：記事末形式について」『東京学芸大学紀要　第2部門　人文科学56』
沢柳政太郎（1910）『我国の教育』同文館
杉本つとむ（1962）「近代語の標章：デアル体の発生と展開」『国文学研究25』
杉本つとむ（1998）「近代語の標章」『杉本つとむ著作選集2：近代日本語の成立と発展』八坂書房
田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』明治書院
中村通夫（1963）「「である」小考」『中央大学文学部紀要29』
中村通夫（1967）「である再考」『中央大学文学部紀要46』
南日恒太郎（1912）「英語研究談」『英語世界』明治 45 年 1 月。再録『英語青年 60 巻 3 号』1928 年 11 月
野村剛史（2019）『日本語「標準形（スタンダード）」の歴史：日本語の焦点：話し言葉・書き言葉・表記』講談社
羽鳥博愛、伊村元道（1979）『教育学講座 9　外国語教育の理論と構造』学習研究社
平尾昌宏（2016）「なぜ論文を<です・ます>で書いてはならないのか：日本語からの哲学・序編（一）」『立命館哲学 27』
古田東朔（1967）「幕末・明治初期の翻訳文等における「X＋アル」」『国語と国文学44巻4号』
松江北高等学校百年史編集委員会編（1976）『松江北高等学校百年史』
松村明、古田東朔監修（2000）『和蘭文法書集成 9　訳和蘭文語』ゆまに書房
松村幹男（1997）『明治期英語教育研究』辞游社
松村幹男編（2006）『明治時代の中学生英語学習帳』西日本文化出版
村井知至（1925）「英語研究苦心談」　第一外国語学校編『英語研究苦心談 ： 十六大家講演集』文化生活研究会
森岡健二（1999）『欧文訓読の研究：欧文脈の形成』明治書院
文部科学省（2020）『平成 30 年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）』〈https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf〉（2022.12.8 確認）
文部省編（1972）『学制百年史　資料編』帝国地方行政学会
柳父章（2004）『日本語の思想：翻訳文体成立事情』法政大学出版局
山田有策ほか編（2020）『尾崎紅葉事典』翰林書房
山本正秀（1944）「デアルの沿革」『橋本博士還暦記念国語学論集』岩波書店
山本正秀（1968）「「デゴザル」体から「である」体へ」『文体論研究 12』
山本正秀（1977）「言文一致体」『岩波講座日本語 10』岩波書店

注

1 文部科学省（2020）p.4。
2 平尾昌宏（2016）。なお論文における「です・ます」体の忌避について、平尾論文では合理的な根拠はないと述べられている。
3 順に、杉本つとむ（1998）p.420、野村剛史（2019）p.103、山本正秀（1977）p.332。
4 福沢諭吉『文明論之概略』の緒言。なお本文は 1970 年版『福沢諭吉全集　第 4 巻』岩波書店による。
5 蘭学の翻訳語を起源とする説では翻訳語としての使用に長崎通詞が関与していることから「である」は元々長崎周辺の方言であったのではないかと推測されている。それに対して中村通夫はより早い例が漢学者等の講義録に多数あり、「である」は翻訳語としての使用以前に教養層の講義口調として定着していたとしている。この議論の詳細については本文に掲げた先行研究を参照されたい。
6 これに関しては山本正秀（1977）pp.334-335 に詳しい。
7 野村剛史（2019）p.103。
8 谷崎潤一郎「現代口語文の欠点について」『改造』1929 年 11 月。
9 北澤尚、許哲（2005）p.20。挙げられている例は、明治 11 年 4 月 4 日 3 面 3 段「小児急病のこゝろ得　第九回」の「是らも心得て置かねバ成らない事で有る」。
10 田中章夫（2001）p.765。佐久間俊輔からの教示、及び小川知子の 1989 年度学習院大学卒業論文の指摘によるものとして「である」体の文章例が挙げられている。
11 杉本つとむ（1998）の p.394 及び p.402。引用文中の「英語学習族」には傍点がある。尚、杉本つとむ（1962）にも同種の指摘がある。
12 学制では上等小学校にも外国語を加えられるとされているが、条件付きのため小論では調査の対象外とする。
13 詳細については松村幹男（1997）pp.14-16。
14 夏目漱石「落第」『漱石全集　第二十五巻』1996 年　岩波書店。
15 次の「であろう」の例も含めて全て B のテキストより、順に p.71、p.76、p.9、p.92。
16 大庭雪斎『訳和蘭文語　前編上』46 丁表。
17 森岡健二（1999）pp.107-145。また馬本勉（2014）の「独習書データベース」はインターネット上で公開されている。
18 今回出版年不明のため除外したのは、クワッケンボス著、島一徳訳『格賢勃斯氏英文典挿訳』の一冊である。また実質的な再版とは、例えば明治 18 年の高柳政籌訳『ウヰルソン氏第一リードル独案内』、明治 19 年の近藤駒吉訳『正則第一リードル独案内』、大久保梅太郎訳『ウヰルソン氏第一リーダー独案内』、この 3 冊のような事例を言う。この 3 冊はページ割まで同じであり、訳者や書名が異なるものの実質的な再版である。このような事例が今回の調査では計 8 例確認できており、それぞれについて出版が最も早いもののみを採った。
19 大学南校はこの後、東京大学、帝国大学、東京帝国大学と名称が変更される。
20 明治 22 年『言海　第一冊』の「語法指南」p.41 及び明治 30 年『広日本文典』p.141。他にも明治 34 年の金沢庄三郎『日本文法講義』p.83 や昭和 3 年の松下大三郎『改撰標準日本文法』p.438 にも誤りや悪用とある。
21 小篠敏明、江利川春雄（2004）p.2-3。
22 青木輔清訳『ウヰルソン氏第一リードル読法改良直訳』本文編 p.3。
23 松村幹男（1997）pp.24-44。

[24] 出典は順に、村井知至（1925）p.7、南日恒太郎（1912）ただし再録 p.103、沢柳政太郎（1910）p.205。なお沢柳政太郎の原文には「直訳法」の横に傍点が付いている。

[25] 松村幹男編（2006）『明治時代の中学生英語学習帳』一冊目の二丁裏。なお英文は富塚玖馬訳（1888）『新撰ニユーナシヨナル第二リードル独り学ひ』p.44 に拠った。

[26] 『松江北高等学校百年史』pp.123-124。後藤蔵四郎の回想。

[27] 沢柳政太郎（1910）p.206。

[28] 千頭清臣（1883）「名題上名辞ノ充実」『東洋学芸雑誌 24』pp.105-110。

[29] 橋本銀蔵編（1884）『官立学校入学試験問題集』島村利助 p.109。和文英訳の 5 問中 2 問が「である」体である。なお入試は出版前年の 1883 年（明治 16）7 月に実施されている。

小峰 克之（こみね かつゆき）　東京通信大学 非常勤講師